

第6学年 国語科の実践

1 単元名 物語を読んで考えを深めよう ～海の命～ 立松和平作 (全15時間)

2 単元目標

○登場人物の相互関係や心情、場面の描写を叙述から読み取り、考えたことを交流し合って自分の考えをより深める。

○「いのちシリーズ」の他作品と並行読書し、読み比べることにより、作者・立松和平氏がこめた「命」への思いを考え、人間の生き方についての考えを深める。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

【聴く・話すを視点に】

4月の学級開きで、「聴く」ということについて児童のとらえ方を聞き、授業で大切にしていきたいことを決めていった。進んで発言する、間違いから学ぶ、そしてしっかり「聴く」ということも出てきた。しかし、実際の授業の中では、音声として聞き取れないくらい声が小さいのに、「もう一度言ってください。」という反応があまりなく、聴いているつもりになっている児童がいた。伝える側の意欲や音量調整、聞く側の意識、両者がうまく合致しないと本当の意味での「聴く」につながらないことを、教師側から伝え、話すことと聴くことは表裏一体である難しいこと、でも今後、より重要になることも学級全員で再確認した。その後、「学級討論会をしよう」の単元では、論題を決め、自分の調べたことを根拠に、ディベート形式での話し合い(討論)をやりたいたいという願いが生まれ、取り組むことになった。普段は自主的に発言できない児童も、討論に勝つためには相手の疑問点をつく質問をしなければならなかったり、判定する側を納得させる意見を話さなければならなかったりする必然性があり、児童にとって一生懸命に話し、聴くことに慣れる経験になった。9月からの「やまなし」の単元では、自分たちで自主的に話し合える経験を積むため、教師が毎回指名せず、自主起立して言いたい人から発言したり、児童による相互指名をしたりすることにチャレンジした。はじめは戸惑い気味であったが、教師が表に出ないため、自分たちが動かないと沈黙の時間が増えるだけでつまらなくなることに気付いてからは、発言力のある児童が口火を切り、まだ言っていない人は？と配慮したり気遣ったりする態度も見られるようになった。話すことに抵抗感のある児童はいたが、みんなが何か一つでも言葉にして「話していこう。」という雰囲気は生まれ、似ている場合でも「～さんと似ていて、自分は～考えました。」と繰り返し、「しつこいくらいでも話し、みんなは根気強く耳を傾ける。」という取り組みになった。

【関わり合い・ひびき合いを視点に】

特定の人以外との関わり方に消極的な部分があるので、いろいろな人の個性に触れ、よさを感じたり、価値観を広げたりできるようになってほしいと、指導者としては願っている。そこで、国語以外にも算数、理科、音楽、体育などではペア・グループで活動したり、交流したりすることを取り入れていった。友達にはそれぞれ個性があり、自分にはないものを必ずもっていることにどれだけ気づき、実感しているかは定かでないが、「いろんな人の意見を聴くことで、新しい発見をした。」「自分が気付かなかったことを知るきっかけになった。」「自分にはそのようなアイデアがなかったから、気付いた～さんはすごいなあと思った。」などの感想をもてる児童が増えてきた。

4 単元と指導について

①教材(作品)の価値と指導者の願い

6年生になって児童は、他の単元・他の教科・道徳などでも、人間と自然とのつきあい方、人間の生き方について折にふれ考えてきた。「命」という大変幅広く、一見抽象的でもあるテーマを、この作品を通し自分なりに考え直し、友達の考えも知ることでより深められるようになってほしい。

本教材は、6つの場面で構成され、起承転結のはっきりした典型的な物語構造になっている。そして、それぞれの場面において、主人公・太一の成長に関わる登場人物の言葉や生き方が描かれ、その影響を受けながら、太一自身が自分の生き方を決めていく話になっている。この作品を通し、どう生きるか、人間と自然とはどう関わっていくのか、などについて考えさせられ、自分はどう生きていきたいかを見つめるよい機会となるだろう。作者、立松和平氏は、この「海の命」以外にも「いのちシリーズ」として色々な作品を残している。他作品を並行読書し、「命」や「生き方」について少しだけ角度を変えながら考え、海の命で読み取り、考えたことと関連付けていく力もつけさせたい。

②具体的な指導と切実な問題について

導入で他の作品があることを知り、好奇心が芽生え、単に「シリーズものが好きだから読んでみようか。」という児童がいると考える。しかし、絵本ではあるものの、描かれている内容は大変重いものであることを知る。

「海の命」は太一の心情について詳しい描写がなく、暗示的な表現から内面にある深い心情を読み取ってい

かねばならない。また、そこに作者がこめた思いが見え隠れする。また、児童の初発感想では、瀬の主であるクエに太一が出会った場面で、「こんな感情になったのは初めて」「泣きそうになりながら思う」「ふっとほほえみ、えがおを作った」「こう思う」「大魚はこの海の命だと思えた」また、最後の場面の「太一は一生涯だれにも話さなかった」という叙述に目をつけ、数々の疑問をもつと考える。また、「やまなし」での学習をふまえ、題名である「海の命」という言葉がたった2カ所しか出てこないのはなぜか、作者は何を伝えたいのかについて考えたいという意見が出るだろう。そのような疑問を集約し、切実な問題として設定し、みんなの考えを出し合わない、一人では答えを出すことが困難であるという思いの高まりをめざした。

③ひびき合い

上記の切実な問題を考えていく過程において、まず自分の考えがあり、時にはペア・グループといった形態になるであろうが、他者と発表し合い、他者の考えに触れる中で得られた「理解：そうか、そう考えるのか。なるほどね。わかった。ここはわかったけど、ここは質問したいな。」「共感：自分も同じだな。～さんとは考えるポイント、目のつけ方が似ているな。発表しても大丈夫そうだ。ちょっと自信がついたな。」をひびき合いの1ステップ目ととらえる。第2のステップでは、全体の話し合いの中で、より多数の他者の考えに出会い、それをじっくりと聴くことによって得られた「理解（質問も含む）」「共感」と、他者の考えを受けて「再考」できることを願う。具体的には「～さんの考えを知ってそれは気付かなかった。そんな考えもあるんだな。他の人の考えももっと聴いてみたいな。」「～さんと自分の考えはこの部分が少し違うかもしれない。もう一回考え直してみたいな。」「～さんの考えから、また一つ疑問が増えてきた。もう一度整理して考えたいな。」などである。これらは児童がお互いを理解しようとする姿になるが、学級のみんなが理解できるようになる姿としてのひびき合い(3ステップ目)としては、全体の話し合いの場で、「～さんが言いたいことは……で、……ということ考えたからだと思う。本当によく考えていてすごいです。」「～さんは……ということを考えていて、それは～さんと～さんの中間かなと思う。」「～さんは文章の……の部分から考えを広げたり、ほかのことと関連して考えたりしていて、誰もがよくわかる言い方をしています。」などと、言い換えたり補助したりできるとよい。教師が言ってしまうがちな児童の発言への価値づけを、できるだけ児童が気付き、よさを認め合っているような時間にしていってほしい。

単元の終盤でポスターセッションをすることになり、海の命を通して考えたこと、並行読書してきた作品と合わせて考えたことを交流する場を設けた。「やまなし」で行った交流以上に、内容的には抽象的で難しいと予想したが、子どもたちができるだけ多くの子の考えに触れ、コミュニケーションをとりながら、使っている言葉・表現・表記のしかたにも注目させるようにした。また、自分が表現上参考にしていきたいという着目点でも見て、聴き合うことで、ひびき合う姿がもてたらよいと考えた。

単元目標

- 登場人物の相互関係や心情、場面の描写を叙述から読み取り、考えたことを交流し合って自分の考えをより深める。
- 「いのちシリーズ」の他作品と並行読書し、読み比べることにより、作者・立松和平氏がこめた「命」への思いを考え、人間の生き方についての考えを深める。

4年 国：ごんぎつね
5年 国：大造じいさんとガン
6年 国：生き物はつながりの中に
理：生き物のくらしと環境
国：やまなし

道徳：人間のために処分される命
読み聞かせ：いのちのおはなし
作：日野原重明

・校歌♪「大切なものは～いのち～」
・命と聞いて思い浮かぶことは？⇒ウェビングマップにする
・立松和平さんという人はいのちについてこんな絵本を書いたよ。(紹介)
海のいのち 山のいのち 木のいのち 川のいのち
田のいのち 街のいのち 牧場のいのち

立松さんが教科書用に書き下ろした「海の命」を読んでみよう

- <題名読み>・海は広いからどこを命とするのかな？・命って生き物にしかないイメージ。自然にも命があるってことかな？
<全文通読と初発の感想交流> (感想を端的に書く⇒座席表配布⇒話し合い⇒読みのめあて設定)
・どうして太一はクエを殺さなかったのかな？なぜ誰にも話さなかったのか？・題名が「やまなし」のときと同じで最後にしか出てこない。
・作者は何を伝えたいのかな？なぜこの題名にしたのかな？

太一の気持ちの変化を読み、海の命とは何かをみんなで考えよう。

起 (1場)

海への思いと父の死

- ・決して自分の技術を自慢することのない父はすごい。
- ・父のようになりたいな。
- ・漁師ってカッコいいな。海大好き！
- ・海で父が死ぬなんて信じられない。
- ・瀬の主がにくい。
- ・父のかたきをとる。

承 (2～4場)

太一の成長とじいさの死

- ・早く一人前の漁師になりたい。
- ・じいさのおかげで自分は海で生きられる。ありがたい。
- ・母に心配をかけたくないが、瀬にもぐり、主をとらえたい。おれの海だ。

転 (5場)

クエを生かした太一

- ・ずっと待っていたあのクエが目前にいる。チャンスだ！でも、おや？
- ・なんでこんなにじっとして穏やかなんだ。殺されたいのか？
- ・ずっとこの日を待ってきたはず。でもなぜか勇気がでない。自分にいらいらする。
- ・クエが別のものに見えて、だれかに殺すと言われていた気分になってきた。

結 (6場)

父となりクエのことは誰にも話さない太一

- ・自分も父親になって命の重さを実感した。
- ・漁師のプライドとして海の命(シンボル)のクエを自分だけの秘密にしたい。

並行読書する

叙述をていねいに読み取り、会話や行動の奥にある心情を深く考えられるようにする。登場人物の相互関係や、生き方についても考えていくようにする。

太一はなぜクエを殺さず、海の命だと思ったのだろう。〈本時〉

- ・クエはこの海の大切な主であり、海そのものと思ったから。
- ・クエが父のように思えたから。

海の「命」とは言いかえると何だろう。作品の、どの言葉や文章からそう考えたかを交流し、深め合おう。

- ・命とは「恵み」と同じ意味。いろんな生き物が共存していること。そして人間はそのおかげで生きていられる。父の言った「海のめぐみだからなあ」からそう考えた。
- ・命は「大切にしなければならない」もの。人間が独り占めしようとして欲張ってはいけいない。与吉じいさの言葉「千びきに一びきでいいんだ。」「不漁の日が十日間続いても、父は少しも変わらなかった」から考えた。
- ・命は「漁師としての生き方が受け継がれていく」もの。「父がそうであったように・・・帰っていった。」や「おとう、ここにおられたのですか。」から、漁師は海の敵ではなく、海に生かされ、共存している存在であり、その魂は海に宿っているのではないか。
- ・命は「守るべき」もの。たとえ漁師であっても、海の中のバランスを考え、いつも謙虚でいなくてはならない。「太一は、瀬の主を殺さないですんだのだ。」や「太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一びきしかとらないのだから、海の命は全く変わらない。」から考えた。
- ・命は「人間を育ててくれる」もの。「おまえは村一番の漁師だよ。太一。ここはお前の海だ。」から、太一が父に憧れ、その死を乗り越えて修行し、じいさに認められるまでに成長したことがわかる。そして「村一番の漁師であり続けた」からは、クエをあえて殺さなかった太一の心が大きく成長し、本当の意味で父を超えるような漁師になったことがわかる。

海以外の「命」はどうなんだろう？「命」は奥が深い。他の作品も読んで考えをもっと広げたいな。

山のいのち・・・山の中では、食べたり食べられたりする関係がよく分かる。むだな命など一つもない。
川のいのち・・・川はいつでも変わることなく流れ続けている。そしていろいろな命を育んでいる。
田んぼのいのち・・・米そのものが命。米作りは小さな命をふやすこと。
街のいのち・・・変わらないようでいて、確実に移り変わる街の四季。時間は生きていて、緑色の街に瞳ははげまされた。
木のいのち・・・戦場を生き抜いた木。人間の寿命に比べ、長い長い時を生きる木。木の命ってたくましい。

ポスターセッションをして友達と交流しよう。(海の命との比較・他作品の紹介・自分の考える命)

めざすゴール

- ・立松さんは、宮沢賢治のように自然が好きで、人間に自然のよさと厳しさを伝えたかったのでは？
- ・どの作品にも、人間は自然を軽くみてはいけいない、大切にしないといけないというメッセージがこめられている。

いろいろな「命」があるんだな。命はやっぱり大切なんだ。どの命も貴重。人間と自然との関係も考えていかねば・・・。

6 本時について

- (1) 本時目標 クエに対する太一の心情の変化を叙述から読み取り、太一の成長について自分の考えをまとめることができる。
- (2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点【評価】
① 学習問題を確認する。 5 場面での 太一、クエの関係・太一の気持ちの変化・海の命とは？ ② 太一とクエが対面する場面を整理しながら、太一の心情について話し合う。 太一の気持ちの変化は？ 与吉じいさと父の帰った海。その海の守り神のようだ。 ここで大魚をしとめたら、大事な海がだめになる。 海のめぐみ、千匹に一匹でいい の言葉が聞こえてきた。 大らかな気持ちになってきた。クエが父に思えたのか？ 父を超え、本当の一人前の漁師になるため にもとらえたいが、できない 葛藤 太一 太一 クエ（瀬の主） 青い目・岩のような大魚・動かない おだやかな目で見ると→殺されたがっている？ 追求めた夢 父を破った瀬の主かも 父を超えるための大物 興奮しながら冷静 こんな感情になったのは初めて 泣きそうになりながら思う ほほえみとえがお 「おとう、ここに・・・」 大魚がこの海の命と思えた	・学習初期に多かった疑問にふれる。 ・前時に見つけている叙述や、書き込みから発表し合い、太一がなぜクエをしとめなかったのかについて、話し合いを焦点化していく。 ・相互指名に努め、考えの似ている人からつなげて発言できるようにする。 ・必要に応じ、ペアトークやグループトークを取り入れ、意見交流をさせる。 ◆叙述からキーワードとなる言葉を探し、心情について考え、進んで話し合おうとしている。【関心意欲態度】 ◆場面描写や人物の相互関係などから太一の心情の変化を想像し、読み取ることができる【読むこと】
③ 5 場面のまとめと、学習感想を書く。	

7 実践を終えて

場面を読み進めるうちに、主人公「太一」は父に追いついたのか、父を超えたのか、について児童の間で話題にのぼるようになってきた。4場面までで、児童それぞれに、「追いついた」「追いついたがまだ超えていない」「海を自由にできるほど認められた、一人前の漁師だから父に近いのではないか」などのとらえ方があった。そして、本時の5場面はこの物語の山場であり、太一にとって心情の変化が大きい場面となる。もともと、なぜ大きなクエを殺さないのか疑問には思うが、何となく殺せない何かがあったのだろうということを感じている児童が多かった。その何かについて、深く話し合ってほしいという願いから、本時は叙述や前場面での出来事、心情などを、順を追って話し合う時間とした。実際に授業が始まり、児童と共に確認しあったところ、本時の課題は「太一の心情の変化を考えて話し合おう」になった。話の筋に沿って、いろいろな叙述から太一の心情をたくさん考え、発表する姿はあったが、内容が多すぎて、話し合いの焦点化ができずに終わってしまった。児童が気になっている叙述を絞り、そこから掘り下げていくほうが良かったかもしれない。

これまでの流れでいくと、話題にあがっていた「5場面で太一は父を超えたのだろうか？」という課題でもよかったと考える。あえて父を倒した瀬の主であろう大魚のクエに出会いながらも、生かす道を選んだ姿こそが父を超える瞬間だととらえる子がいるだろうし、クエを殺さなかった優しい太一であっても、まだ海の恵みの大切さを知り始めたばかりだから、まだ超えていない、この後に超えていくはず・・・と考える子もいるだろう。父を超えたかについて話し合うことによって、太一の心情を深く考え、海の命とは何かまでつながっていく可能性もあった。また、「海の命とは何か？」に絞って話し合うことにより、太一が葛藤しながらも海を守ろうとした心情をより深く追求できたかもしれない。

また、板書について、内容が複雑になってくるほど、児童が出した意見をしばらくみんなで読み返し、内容を整理する時間を設け、考えを練り直す時間も確保していく必要が出てくると、協議で話題になった。

ひびき合いを高めるため、単元を通して「できるだけみんな発言しよう。」と投げかけてきた。太一の心情を真剣に考える児童が多く、どの言葉からそれが分かるのかを意欲的に発言することは増えた。自由起立を取り入れたり、相互指名を取り入れたりし、考えの似ている人から少しずつ話していくことにも慣れてきた。友達の考えに触れ、「いいな」と感じたり、「自分には考えつかなかった」と素直に感じている児童もいた。特に初発の感想で疑問をもったことが解決できたり、命について深く考えられてよかったと感じていたりする児童にとっては、とても印象深い物語となったようだ。いろいろな意見をたくさん出し合うことのよさを積み重ねてきたのは成果であるが、

「海の命」が父に見えたクエだけでなく、そう思うことにした太一の気持ちやもっと深い意味（海全体のシンボル、生態系、命のつながり・・・など）について迫れなかったことは話し合い方のつたなさによる課題である。

単元後半では並行読書をしていた「いのちシリーズ」の本と「海の命」について、自分の考えたことをもとにポスターセッションをしたが、自然を大切にすることや、自然と向き合っていく人は成長していくという部分に目をつけている児童もいて、6年生として成長した姿を目にすることができた。